

第44回理事会開催

1987(昭和62)年度の事業計画を決定

トヨタ財団では、去る3月17日、第44回理事会を東京都内に於いて開催し、第3回研究コンクールの研究奨励特別賞などを決定するとともに、1987年度の事業計画を決定した。

この結果、昨年度の助成実績額は5億1,412万円、本年度の助成予定額は、5億4,500万円となった。その内訳は7頁の表に示すとおりである。

●研究助成の公募は5月末日まで

理事会の決定にもとづき、本年度も研究助成の公募を4月1日から開始した。基本テーマは昨年度と同様『新しい人間社会の探求』。また、研究種別も、個人奨励研究(第I種)、予備研究(第II種)、総合研究(第III種)となっている。

●活動記録助成の公募も5月末日まで

昨年度に引続き、『新しい人間社会を目指した市民活動の記録』をテーマに、その作成に対する助成の公募を4月1日より開始した。なお、これまでに本助成により作成が完了した記録の出版に対する助成の申請も受け付けている。

●第5回研究コンクールはこの秋に公募

“身近な環境をみつめよう”をテーマとする研究コンクールの第5回は、本年11月1日より公募開始の予定。

第3回研究コンクール“身近な環境をみつめよう”

「都市鳥研究会」に研究奨励特別賞を贈呈

1983年10月に公募を開始して以来、約半年間の予備研究を経て2ヶ年の本研究へと段階的に進められてきた第3回研究コンクールは、先の理事会にて研究奨励特別賞1件を決定した。受賞したのは東京の「都市鳥研究会」(代表 唐沢孝一)。

去る4月3日には東京港区の国際文化会館にて、関係者多数が出席のもと、賞の贈呈式と研究報告会が開催された。同研究会には、賞金100万円と今後の研究助成金として1,000万円が贈られた。(次頁参照)

おもな内容

- ◆第3回研究コンクール特別賞の選考を終えて… 2
- ◆研究助成の公募にあたって… 3
- ◆見えてきた『日本型』のネットワークキング… 4
- ◆「タイ日辞典」の刊行にあたって… 5
- ◆第23回研究報告会から… 6
- ◆個人奨励研究交流会を開催、他… 7
- ◆最近の報告書から、他… 8

●国際助成の応募は年中受付

主に東南アジアの人々(グループもしくは個人)によって現地で行われる固有文化の保存と振興に関するプロジェクトに助成するもので、公募期間は特に定めず、年中打診や応募に応じている。

●成果発表助成の申請も年中受付

当財団の助成による成果の印刷・出版、シンポジウムの開催などに関する成果発表の助成は年中受け付けている。

●日タイ修好100周年記念事業に協力

日タイ修好100周年を記念した「タイ美術名宝展」が、両国政府の協力のもと、この秋に日本において開催される。当財団では、助成成果の一つであるタイの寺院壁画の展示に関連した本事業に協力を行う。

第23回研究報告会開催…

2月14日、「高度技術社会における安全管理システム」と題する研究報告会を東京にて開催した。(6頁参照)



▲研究報告を行う「都市鳥研究会」唐沢孝一氏



第3回研究コンクール “身近な環境をみつめよう”

研究奨励特別賞の選考を終えて

選考委員長 浅田 孝

第3回研究コンクールは、研究奨励特別賞1件を理事会へ推薦することで長い競走のゴールを迎えた。テープを切ったのは東京の「都市鳥研究会」である。まずはチームの方々に心からの拍手を送りたい。さらに、これまで長い道のりを文字通り試行錯誤しながら切り拓き、それぞれにユニークな成果に到達された他の9チームの方々にも深く敬意を表する次第である。

◆新しい市民社会の展開を実感させるコンクール

今回のコンクールの公募は1983年10月に開始された。そして全国から86チームの参加があり、そのうち19チームが予備研究に進んだ。さらにその中から厳しい選考を経て10チームが本研究に進出した。86年11月に行われた最終報告会ではこれら10チームが2年にわたる研究の成果を発表し最終選考を待つこととなった。各チームが応募を思い切ってから、成果を見るまでに実に丸3年にも及ぶ。もともと研究を職業としない人たちが集まり、いわば余暇の領域でこれだけの長きにわたってチームワークを維持しながら、いずれ劣らぬ優れた成果をまとめめたことは、新しい市民社会の展開を実感させるものといえよう。

◆熱い思いを寄せた選考委員

一方、選考にあたられた委員の方々がこのコンクールに注がれたエネルギーもみなみなならぬものであった。選考委員会は通算8回に及ぶ。しかも毎回は長時間にわたる白熱の議論となる。予備段階と中間段階で行われた現地インタビューでは各委員はそれぞれ2ないし6カ所を分担して現地視察をされたことになる。各委員がそれぞれのチームに寄せる思いもまた熱いものがあった。

最終選考は、報告会の発表を踏まえ、なおかつ各委員分担して報告書を精査し、十分な論議を尽くすという慎重を極めたものであったが、都市鳥研究会を特別賞とすることではほぼ全員の一致を見た。ただしこのことは、都市鳥研究会の方法が身近な環境研究のモデルとなるべきだということを意味しているわけではない。研究コンクールの趣旨からは、私どもは、身近な環境について

っそう独創的にかつ多様な試みが次々と登場することを期待している。

◆今回のコンクールの特徴

このコンクールの特色は、参加チームが常に他のチームと競走しつつ共通のゴールをめざすという緊張感、あるいは時として選ぶ側と選ばれる側との立場を越えた共感と相互のコミュニケーションといったところにあると言えよう。これまで3度と回を重ねるごとに次第にこのようなスタイルが形づくられてきたように思う。特に第3回コンクールでは前回までとちがって研究奨励賞（本研究）の段階で金賞、銀賞の2種を分けなかったこともあって、各チームの競走意識は高かったようである。また各チームとも、報告会ないしはインタビューの際の各選考委員の意見や、財団事務局が作成する経過資料およびコンクールニュースなどで紹介される委員の感想などをかなり詳細に分析し、ある部分には反発し、またある部分は取り入れたりするなど、チーム内での議論を闘わせてきたように見受けられる。こうしたコンクール独特のスタイルがひとつひとつの研究にもダイナミックな展開をもたらしたのであろうか、いずれのチームも予備段階、中間段階、最終段階と順を追うごとに格段の成長を見せたというのが各委員の等しくいただいた感想であった。



これまで3回にわたるコンクールで、「身近な環境をみつめよう」という思いを共有する人々——チームの方々も選考委員も含めて——を結ぶ「糸」が少しは見えてきたように思う。今後より広く裾野を拡げ、さらなる展開をはかるためにも、財団当局はこの糸をつむいで、やがてりっぱな織物となってゆくよう努力を傾けてほしいものである。

なお、今回の研究奨励特別賞の選出にあたっては、最終選考委員会（1987年1月末開催の第8回選考委員会）において、柴田敏隆先生（第1回・第2回研究コンクール選考委員）に専門委員としてご参加いただきました。ここに改めて感謝申し上げます。

注：本稿は、トヨタ財団第3回研究コンクール“身近な環境をみつめよう”経過資料④から転用したものである。

なお、この経過資料をお求めの方は、240円切手を同封の上、研究コンクール係宛でお申込みください。



継続的な研究の重要性

—研究助成の公募にあたって—

プログラムオフィサー 山岡義典

【ある研究報告から】

先頃一冊の報告書が印刷され、関係各方面でちょっとした話題になっているようである。前橋市のインフルエンザ研究班（班長：由上修三）がまとめた「ワクチン非接種地域におけるインフルエンザ流行状況」（7頁参照）で、開業医や教育関係者が協力して5年にわたって市内の小学生のインフルエンザ流行状況を多角的に調べてきたものの成果である。

現在わが国では、小・中学生へのインフルエンザ予防接種が義務づけられているが、前橋市では医師会の判断によって昭和55年以来これを止めている。もしその結果、大流行にでもなれば、地域の健康をあずかる医師としては大変である。この研究は、そのような責任感からスタートした。予防接種の経験のない当時の小学校2年生約600人を対象に、5年の長きにわたり毎年流行期の前後に血液採取を行い、HI抗体価を測定するという根気のいる作業が進められた。日常の診療で多忙な医師たちの努力もさることながら、子供や親たちの信頼感がこれを可能にしたと言っても良いであろう。

研究の結果、他の予防接種を実施している地域に較べ、とりたてて大きな変化が起きなかったことが確認され、自然感染によって免疫が得られ一定期間それが

▼HI抗体価測定のための学童採血



持続することなど、さまざまな重要な知見も得られた。今、厚生省では、インフルエンザワクチンの強制接種について再検討を進めているが、この報告書が従来にない新しい貴重なデータを提供することは間違いないであろう。

この研究は、最初の3年間は「研究コンクール」の受賞研究として、後半の2年間は一般の「研究助成」による研究として進められ、最後の報告書の印刷は「成果発表助成」によって実現した。助成総額にすればそれほど大きな額ではないが、5年にわたる継続研究は財団としても初めての試みであった。

【社会性のある研究】

以上に紹介したのは、トヨタ財団の最近の助成研究の一つの例であるが、これは私たちが普段から何気なく言っている「社会性のある研究」の典型的なケースではないかと思う。そういう観点からこの研究の特徴を指摘すると次のようなことが言える。

まず重要なことは動機であろう。『人の命』に対する真摯な洞察から予防接種の中止という思い切った決断に至り、その決断の事後を長期的に追跡調査するという行為に出たわけだが、ここには地域社会に対する強い愛情と責任感を見ることが出来る。

次に大切なことは、この研究チームに対する地域社会の側からの理解と信頼が得られた点であろう。逆に言えば、研究チームの側は、常にそのための努力を払ってきたということである。子供たちからの採血を、単なる調査のためだけとせず、健康診断として生かした点にもそれがうかがえる。

さらに、さまざまな立場や職種の人々の協力による「職歴型の共同研究」であるという点が重要であろう。それは、個々の研究者の立場からすれば、それぞれの専門を生かしながらも本務としての職業とは別途の、無償の「裏作研究」（本レポートNo.36参照）であるということである。

ある。

そして、もう一つの大事な点をあげれば、忍耐強い継続性のある調査をなし遂げたということである。5年も待たなければ成果の出ない研究というのは、功を焦る研究者にはなかなか出来るものではない。しかし、社会的な現象を正しく把握しようとすれば、5年どころか10年あるいは20年といった継続的な観察が必要なことはしばしばある。

以上いくつかの特徴を述べてみた。これらの要素は、必ずしも「社会性のある研究」にとって不可欠のものではないかもしれないが、重要な要素であることには違いあるまい。

【継続するということ】

継続的な観察調査が重要なことは言うまでもないとしても、ただ何でも続けばいいというものではない。最初のボタンを掛け間違えば、いくら同じ観察を積み重ねても、それは砂上の楼閣でしかない。継続研究には、最初のしっかりと見通しと計画が必要であろう。

今年もこの4月から研究助成の公募を開始したが、じっくりと腰を落着けて構えた「社会性のある研究」の応募を期待したい。とりわけ、長期観察型の研究を重視したいと思う。

もっとも、だからと言ってすべての継続調査が継続的な助成を必要とするとは限らない。あるものについては、数年おきの助成で良いであろうし、ある場合には、最初の数年間の助成で十分な基礎固めを行えば、あとは自前で続けたり、他からの財源が得られるといったこともあるであろう。助成を行う立場からすれば、継続助成ばかり行っているのは、活動が硬直化して新しいテーマへの着手がおざりになる。絶えず新陳代謝に目を配りながら、本当に必要なものに限って持続性のある助成を行うというのがふさわしいのであろう。ともあれ、継続的な研究助成は、助成をする側も受ける側も、大いに忍耐の要ることではあると思う。



少しずつ見えてきた『日本型』のネットワーキング

ネットワーキング研究会代表 播磨靖夫

※二つのネットワーキング

昨今わが国では、ネットワーキングという言葉が流行語となり、さまざまな分野においてネットワークづくりの必要性が叫ばれているが、そこには主に二つの大きな流れがあるように思う。

その一つは、政府、行政、企業がすすめる上からのネットワークづくりである。即ち、これまでの成長を維持するために、社会資源を適性に分配し、効率よい活動をすることを目指したネットワークづくりである。

もう一つは、“草の根”レベル（下）からのネットワークづくりである。現代文明の破綻で危機的状況にある「生きる場」を守るために、また「生きる場」をより“共生的”にするために、それぞれの独自の考え方や価値観を生かしつつ、必要に応じて柔軟で実効力のある共同行動ができる組織であり、運動である。

いずれのネットワークづくりも社会的資源に関する情報を共有することを目的にしているが、その目指すところは大きく異なるのである。

※開放的なフォーラム

私たちは、草の根レベルのネットワークづくりに注目し、3年前から「ネットワーキング研究会」をつくり、新しい形の社会組織原理としてのネットワーキングと、その可能性について研究している。2年前からトヨタ財団の助成を受け、「市民活動としてのネットワーキングを考える」をテーマとする定例フォーラムを隔月毎に開いているが、その結果、“日本型”ともいべきネットワーキングが少しずつではあるが見えてきたように思う。

ネットワーキングというのは、新しい哲学や世界を実現するための、それに相

応しい組織論、方法論といってもいいだろう。それを研究するにあたっては、やはり、それに相応しい組織論、方法論をということで、従来のアカデミズムの枠にとらわれないフォーラムづくりをした。その一つが、市民運動家、ボランティアディレクター、ネットワーカー、学者、研究者といった多次元のメンバーで構成していることである。従って、フォーラムそのものがネットワーキングの一つと化して、ここからさまざまなアイデアやプランが生まれてきている。

その一つが、「移動フォーラム」を兼ねた全国各地で年数回開くシンポジウムである。これまでに、『学習のネットワーキング(1)』（津山）、『普通の人々のネットワーキング』（東京）、『新しい生活文化のためのネットワーキング』（札幌）、『街・わたしのネットワーキング』（足利）、『学習のネットワーキング(2)』（松本）、『地域・おんな・仕事のネットワーキング』（宇部）を開催し、各地のネットワーカーとの交流を深めてきた。特に、2年連続して開いた『学習のネットワーキング』では、この試みに共鳴した朝日、毎日新聞の記者がネットワーカーとして協力してくれ、「もう一つの学び」を求める活動家が年一回お互いの情報を交換する場となりつつある。

このような「移動フォーラム」を軸としたシンポジウムの参加者は増える一方で、ネットワーキングに対する関心が高まってきている現われでもあろう。このようなフォーラムのあり方は、本来のフォーラムのあり方からはやや外れているかもしれないが、情報の共有をうたうネットワーキングに相応しく成果の分かち合いをしていくことを目指したのが、この



▲宇部で行われた「移動フォーラム」でのひとコマ

ような開かれたフォーラムとなったのである。（定例フォーラムでも、コア・メンバー、アソシエイト・メンバー以外にいろいろな分野の人が参加している）

※出始めた成果

この2年間、私たちはネットワーキングに係わっているさまざまな分野の人々をゲストスピーカーに迎え、研究成果や情報を聞くことを中心に進めてきた。それは、「ネットワーキングが新しい体系やシステムや組織や制度を作るもとである“ノイズ”の発生装置」——時代の新しい変化はいつも“音”に現れる——だからである。

さまざまなノイズを聞いているうちに、社会を変えていこうとする新しい動きが次第に見えてくるのではないだろうか、という期待があったが、今のところは概念づくりの基本的作業を終えたところで、残念ながら、ネットワーキングの具体的な定義や日本型ネットワーキングのあり方あるいはその可能性を解き明かすまでには至っていない。

本フォーラムがきっかけとなり、異なる分野の情報交換が活発になり、最近ではその成果がメンバーの著書や論文の中で発表されだしている。また、メンバーが各地のシンポジウムなどのイベントに関わることで、具体的な形でフォーラムの成果を還元している。これらのことが、やがて「新しい人間社会」創造の糧となることを期待したい。



“少数派”言語の辞典づくりに、もっと必要な理解と援助

——『タイ日辞典』の刊行にあたって——

天理大学 おやさと研究所教授 富田竹二郎

● やっと出来た『タイ日辞典』

去る1月27日にやっと出版できた。B5版、39行、2段組、2,208頁（養徳社）である。やっとと言うのは、最後の校正が終わろうとしていた時に病気で倒れ、危く一命を落としかけたからである。睡眠不足や過労などが原因らしい。思えば無茶なことをしたものである。

『タイ日辞典』を作ることは、私の使命と心得ていた。困難で気の遠くなるような仕事ではあるが、いつかはやり遂げねばならぬという執念は、昭和17年に日タイ交換学生として出発した時から開拓者としての私に負わされた宿命のごときものであった。しかし完成できたのは、時運と良き協力者にめぐり逢えたからでもある。

● 困難な“少数派”言語の辞典作り

“少数派”言語の辞典作りには、英仏独語などの辞典を作る数倍の困難を判う。相手国との学問の諸分野における水準のずれ、それに伴う資料の不足および共同執筆者が極めて少ないからである。そして活字を使って組版すれば、印刷費に1億円以上はかかるので——かといって日本語・特殊語が一台で打てるワープロはまだ発明されていない——3台以上のタイプライターを使わねばならない。それは至難の業であり、タイピストがどこにでもいるわけではない。また、出版しても買う人が少ないために発行部数が少なく、価格も高くなる。更に、あまり儲けがないために喜んで引き受ける出版社は少なく、命がけて編纂し、製版して出版し、仮に売り切れたとしても、出費も税金も高く、編纂者は骨折り損で、家族の理解が得難いことなどが主な理由である。タイ語ですらこうで、もっと条件の悪い

言語はたくさんある。大体こういう言語の辞典を作ることは、編纂者が作文してあちこちに助成をお願いするのではなしに、国際親善を看板にしている経済大国であるわが国・政府の方から言語別に作成依頼をして来るべきではなからうか。作れる人はごく僅かしかいないからである。留学生を呼ぶのは、辞典や宿舍などがちゃんと出来てからで良い。この辞典は、幸いトヨタ財団の助成により出来たものの、まだダルマの片目が開いただけである。タイの人々（タイの高校・大学での日本語学習者は約15,000人）のために、タイ人の日本語学習者と共同で、本辞典と同様、2,000頁程の『日タイ辞典』を5年以内に完成すべく始動しているが、タイの人々が買えるように価格を1部3,000円程度に抑えねばならない。それを5,000部刷るために各方面のご援助をお願いしたい。

● 『タイ日辞典』の特色

本辞典の特色は、語彙約5万に豊富な例句例文（2名のタイ人教授に作ってもらったのも加えた）をつけ、使用頻度の高い重要語には語源、同義語、反義語、類似語、口語、文語、俗語、王語などをなるべくそろえて対比させ、多くの用例を示すことにした。この点では最も詳細なタイ語辞典ではなからうか。タイで最も頼りになる学士院版の最新の『タイ語辞典』のほとんどすべてを包含しているから古典の研究にも使えるだろう。略語、俗語、王語、方言もかなり豊富に入れておいた。なるべく多くの語について語源の解説を試みたが、これには大変な労力を要した。また、タイに関する百科辞典的な役割をもたせるために、重要地名、重要人物、書名などの多くの項目につい



▲刊行された『タイ日辞典』

ても解説した。例えば、山田長政48行、ピブーン元帥88行、仏陀に至っては115行も費した。一行は邦文で26字である。それでもまだ不足と思い、付録でタイ地理メモ、歴史年表、官庁組織表、度量衡調表、泰京歳時記等々をサービスした。1頁増えるごとに費用が高くなるが、そんなことには構っていられた。

動植物の扱いも甚だ厄介であった。古いものには学名がついていない。特に古典文学中の植物名には「植物の一種」としかタイの学者にも分からぬものがあったて手を焼いた。タイ名と和名が結びつけられるのはラテン語の学名が一致した時だけであるが、そういうことがかなり出来るようになったのは、最近のことである。しかし、日本の図鑑を見れば日本で見られるものを主としており、タイの名鑑（図鑑は希である）ではその逆であるから始末が悪い。学名がまちがっていることもあった。鳥についても山階芳磨：『世界鳥類和名辞典』（大学書林）が出たのは校正の最終段階で、間に合ってよかった。若干の和名が行間の狭い所に入っているのはそういうわけである。例えば、ツバメの解説に58行、ウナギというタイ語に39行も使ったが、タイ語と日本語の用法がまぎらわしいので、徹底的に調べた結果である。しかし、これは私の個人的な趣味でもあって、こういうことが自由に出来るのも自費出版の楽しみと言えは言えるであろうか。



第23回研究報告会から

安全管理をめぐる白熱した討論

去る2月14日(土)、当財団では高度技術社会における安全管理システムをテーマとする研究報告会を開催しました。以下にその概要を紹介します。

なお、当日の配布資料に若干の余部がありますので、ご希望の方は、240円切手を同封の上、研究報告会係宛でお申し込み下さい。

【研究報告1】

災害事例の総合的データ・バンク・システムの作成とその運用に関する研究

この研究は、昭和58年秋以来3年にわたる研究助成によって行われたもので、当日は、研究代表者の村上處直氏(防災都市計画研究所・所長)が報告を行った。同研究所や共同研究者はこれまでに世界中の災害や事故の事例情報を収集してきたが、今回の研究は、その蓄積された膨大な素情報をデータベース化することにより、総合的かつ体系的に「過去の災害事例に学ぶ」システムを確立することを目標としている。3年間の研究でシステムのプロトタイプを完成させ、写真資料も含めた原データが光ファイルとして蓄積され、原データをもとにした2万件以上のカルテも作られた。今回の報告ではこのシステムの全体像や、それを用いた

災害関連チャートの作成事例についての紹介が中心となった。

この報告に対し、総合研究開発機構理事長の下河辺淳氏が国土計画における防災という観点から、また東京大学新聞研究所教授の田崎篤郎氏が災害心理学を研究する者の立場からそれぞれコメントを行った。

下河辺氏は、こそくな対応のくり返しでは国土の防災政策は困難であり、今こそ系統的な災害科学の確立が必要なことを述べ、その第一歩としても災害情報を多方面にわたって集積したデータベースが必要なことを指摘した。また、災害は現在の人間社会の病気のようなもので、それを部門別にはなくトータルな見地から考えることの必要性を強調した。

田崎氏は、データベースの作成や運用には膨大なエネルギーを必要とするが、それに見合う有効性があるかどうかという疑問を投げかけた上で、特に原データの信頼性チェックの重要性や災害に対する人間の側の対応に関するデータあるいはキーワードの必要性について指摘した。

その他フロアーの参加者も含めて活発な質疑討論が行われたが、論議のひとつの焦点は、このシステムをどのような性格のものとして位置づけるか、そのためにはあと何が必要かということであった。

【研究報告2】

航空におけるインシデント・リポート・システムに関する総合的研究

この研究を行った航空法調査研究会は、民間航空会社のパイロットなど航空実務関係者も加わった任意の研究グループである。標題にあるインシデント・リポート・システム(IRS)とは、事故には至らなかったものの「ひやり」とさせられた体験などを、当事者がそれぞれ第三者機関に報告し、それを共有された情報とすることによって潜在的な危険要因を発見し未然に事故を防止しようというものである。

この研究会は、昭和59年度の研究助成

によって定期航空全6社の乗員約2,500人に対するアンケート調査を行い、インシデントに関する多くのデータを蓄積し発表してきているが、今回の報告会では、代表の宮城雅子氏より、昭和60年度の助成で実施したより詳細なインシデント事例に関するアンケート調査から明らかとなったインシデントの容態やその構造について、数量化第Ⅲ類による分析の立体模型なども用いながら報告された。また調査結果に基づく具体的な改善事項についても提言があった。

この報告に対しては、医療情報システム開発センター理事長の大島正光氏より、人間工学の立場から、また、放送大学教授の林知己夫氏より、統計数学の立場からそれぞれコメントがあった。

大島氏は、時間の都合から報告の前にコメントを行ったが、現代の巨大システムを最後に統括するのは人間であり、誤ることが人間の基本的な特性であるということを確認した上で、各自のインシデント体験を共有のものにしていく必要性を指摘した。そして、その実現のためには免責制度の確立が不可欠であることを強調した。

林氏は、自らの事故調査の体験に基づき、今後の事故防止策としてはIRSが最重要であることを指摘した上で、その実現のためには正直なレポートがもれなく提出されるような条件を整えること、多数の情報を適確に分析して真にエッセンス的なものを抽出する技法を開発すること、の必要性を述べた。

さらにフロアーからも、多数の発言があった。

▽ ▽ ▽

今回の2件の研究はいずれも現場に密接に結びついているだけに、当日会場を埋めた約130人の参加者は、それぞれ行政機関や企業などで日頃安全管理に係わっている方々が多数を占め、討論もきわめて具体的なものが多かった。

(久須美記)

▼研究報告を行う宮城さん





1986年度助成額および1987年度助成予定額（1頁参照）

最近の報告書から

項目	1986年度助成額(万円)		1987年度助成予定額(万円)
1. 研究助成	64件	20,730	20,000
2. 特別研究助成	—	—	1,000
3. 活動記録助成	16件	2,500	2,500
・記録の作成	11件	2,000	2,000
・記録の出版	5件	500	500
4. 研究コンクール助成	9件	5,000	1,000
・第3回	1件	1,000	0
・第4回	8件	4,000	0
・第5回	—	—	1,000
5. 国際助成	52件	9,952	13,000
6. 翻訳出版助成 (「隣プロ」)	17件	5,404	6,500
・日本向け版	9件	1,372	2,000
・東南アジア向け版	4件	2,477	2,500
・東南アジア相互版	4件	1,555	2,000
7. 東南アジア研究 英訳刊行助成	—	—	1,500
8. 辞書編纂出版助成	2件	1,200	0
9. フォーラム助成	4件	1,300	1,500
10. 民間助成活動促進 プログラム助成	4件	1,550	1,500
11. 成果発表助成	27件	3,626	4,000
12. 特別助成	—	—	2,000
13. その他の助成	1件	150	0
計	196件	51,412	54,500

当財団の助成研究から、「成果発表助成」によって印刷された報告書を紹介します。入手ご希望の方は、送料分の切手を同封の上、財団レポート係宛てお申込み下さい。(品切れの節はご容赦の程を)

C-008 六郷の地名と空間——“小字”地名の解析による農村社会空間のあり方に関する研究——(環境農学研究会, B5 148頁 和文, 送料300円)

山形県米沢市の六郷地区は、典型的な稲作地帯で、200を越える小字から成る。この小字名を、地域の自然条件や社会的・歴史的条件を示すものとして分析し、その中から将来の地域空間のあり方を模索しようと、東京と地元の研究グループが共同して第2回研究コンクールに応募し、受賞して調査を開始した。この報告書は、その3年にわたる調査の結果をまとめたものである。

C-009 身近な環境の観察を支援する情報の提供に関する研究(笹田剛史・他, B-5 146頁 和文, 送料300円)

この報告書は、第2回研究コンクール研究奨励賞受賞チームの、3年間にわたる研究の成果。研究では、阪大環境工学科の研究グループと、兵庫県三田市の小学校教員グループ、三田駅前商店街有志グループなどが一体となり、パソコンを利用したわかりやすい地域情報システムの開発と運用に取り組んだ。最近、各自治体などで同様の試みがなされるようになってきたが、本書はその先駆的事例の報告であり、カラー印刷を多用したグラフィックの実例や詳細なユーザーマニュアルなど、実用性はきわめて高い。

C-010 ワクチン非接種地域におけるインフルエンザ流行状況(由上修三・他, B5 88頁 和文, 送料300円)

学童へのインフルエンザ予防接種は、法律によって義務づけられているが、群馬県前橋市では医師会の判断により昭和55年以降接種を見合せている。予防接種を行わなかった場合、行った地域に較べて

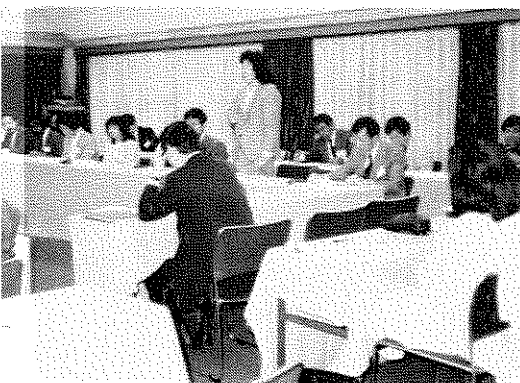
個人奨励研究交流会を開催

去る4月12日に、標記の交流会が国際文化会館(東京・六本木)にて開催され、日曜日にもかかわらず、かつて助成を受けられた方々をはじめ多くの関係者が一堂に会し、活発に交流を深めあった。

この試みは、これまで(昭和57～60年度)に当財団・研究助成の「個人奨励研究」として助成の対象となった研究につ

いて、その後の展開状況や各研究者の近況などを報告していただくことにより、財団側と研究者の相互理解を深めるとともに、研究者相互間の研究交流を計る場として計画されたものである。会は3部構成から成り、第1部では、主に海外に研究フィールドを設定した研究者6名からの報告があり、第2部では、各出席者の自己紹介の後、「トヨタ財団の研究助成に望むこと」をテーマとしたトーク・インが行われた。そして第3部では、出席者全員が参加した懇親会が行われ、時が経つのも忘れる程に熱心な情報交換が行われた。

◀いろいろな意見が出たトーク・イン





どのような問題が発生するかは、地域の健康に責任をもつ医者にとっては重要な関心事である。医師会内に設けられた研究会は、当財団の第2回研究コンクールによって3年間の追跡調査を行い、さらに研究助成によって2年間の調査を行った。今回の報告は、この5ヶ年にわたる調査の成果であり、約600人の児童のHI抗体価の変動など貴重なデータが納められている。(3頁参照)

C-012 児童・生徒の目を通して見た沖縄県首里地区の「ふるさ」と「にあい」のあるまち景観の発見と評価に関する研究(首里のまちなみを育成する会、B5 105頁 和文、送料300円)

小・中・高校生の目を通してその居住地の景観を評価し、彼等の手によってその未来像を抜き出そうという試みが、第2回研究コンクールの受賞研究の一つとして行われた。沖縄県首里地区の図工や美術の先生を中心に琉球大学の先生も加わって進められたものである。この報告書は、その3年間の成果をまとめたもので、景観評価の様々な試みが多数の図によって示されている。

C-014 市街地周辺農地を利用した都市住民による自給農場運営の可能性に関する調査・研究——東京都下国立市・日野市を中心として——(明峰哲夫・他、A-4 68頁 和文)

C-014 街を耕す——やほ耕作団の試み(明峰哲夫・他、A-4 94頁 和文、送料 2冊共で300円)

この報告書2冊は、第2回研究コンクールで研究奨励賞を受賞した「やほ耕作団」の研究の成果。研究は、調査Ⅰ—市街化区域内農地の状況、調査Ⅱ—都市住民による耕作の試み、調査Ⅲ—やほ耕作団の試み、の3つからなる。2冊の報告書のうち前者がこれら3調査の総括報告書で、後者が調査Ⅲをより詳細にまとめたもの。標題に言う「自給農場運営の可能性」を一般解として示そうというのではなく、自らの実践記録により一つの解の例を示したのが本報告書である。

003 重度身体障害者の自立生活——日本的自立生活援助センターについての研究——(谷口明広、B-5 108頁 和文、送料300円)

著者は、京都で障害者自立生活問題研究所を主宰している。トヨタ財団の1984年度第1種研究の助成により京都市およびその近郊の四肢障害者など98名を対象に、自立生活に関するインタビュー、アンケートを交えた詳細な実態調査と意識調査を実施した。本書は、かつて米国のパークレー障害者自立生活センターで学んだ経験と、この調査結果とを総合し、「日本的自立生活」について論じたもの。米国籍の自立生活概念を直輸入する危険性を説く啓蒙書としての性格ももった、実態調査報告書である。

004 過疎と過密に生きる三世代の日本人——将来の社会システム構築への施策(熊谷文枝・他、B5 127頁 和文、送料300円)

日本社会の高齢化は急速に進みつつあるが、その様相や必要な対策は地域によって大きく異なるはずである。この報告書は、過疎地農村(新潟県南魚沼)と巨大都市近郊(東京都世田谷区)からそれぞれ一地区をとりあげ、三世代同居家族に焦点を当てて面接調査を行ったものの成果である。調査の内容は、生命学的要素、文化的要素、社会的要素が高齢者の心の安定や満足度にどう関係しているかを実証的に明らかにしようとしたものである。

III-035 南西諸島の「聖域」における宗教空間の研究(浦山隆一・他、B-5 205頁 和文、送料300円)

沖縄県各地には、御嶽(ウタキ)と総称される聖域が数多く存在しているが、今日でもタブーの領域としてその実態はあまり明らかにされていない。代表者等は、昭和54~59年にかけ、当財団やその他の

研究助成を受け、沖縄県全域に所在する御嶽及び祭祀家屋の現地実測調査を実施した。本報告書は、研究対象とした沖縄県内における聖域の形態と空間に関する建築的構成概要・図面・写真など基礎資料を事例別に整理した報告書である。

〔経過報告会のお知らせ〕

トヨタ財団では、下記の通り、昭和61年度研究助成および活動記録助成に関する経過報告会を実施予定です。(場所はいずれも東京・六本木の国際文化会館)

出席ご希望の方は、報告会係宛てご連絡ください。

〔研究助成〕

5月8日(金)・9日(土)および5月12日(火)

〔活動記録助成〕 5月15日(金)

【お 願 い】

本レポート登録者の方で、ご所属(勤務先)やご住所が変更になった方は、至急財団レポート係宛てご連絡ください。

編集後記

◆さあ！またまた新年度となりました。一年というものが実に早く感じられる昨今ですが、気分も新たに活！

◆「都市鳥研究会」の皆さん受賞おめでとうございました。この研究が、将来、「鳥の目から見た街づくり」に展開されることを期待しています。

◆播磨先生、富田先生、ご寄稿ありがとうございました。それにしても播磨先生、宇部の「オバチャン・パワー」あふれるフォーラムでは、タジタジでしたネ。

富田先生、辞典づくりに対する熱い執念と血の滲むようなご苦労にはただただ頭の下る思いです。

発行日 1987年4月20日

発行所 財団法人 トヨタ財団

発行人 山口日出夫

編集人 渡辺 元

印刷 真友工芸株式会社

トヨタ財団レポート No.40

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団宛てお申し込みください。